

生産関係の国家的形態としての

国家独占資本主義について

井 汲 卓 一

ある社会は、必ずある構成の原理をもち、それに規制されながら、必ずある限定された形態においてあらわれる。

資本主義の社会は、同じ資本主義の原理とする幾つかの同じような、しかし相互に独立した社会が密接な相互連関とからみあいのちに作用しあいながら、全地球を蓋うところの世界体制として形成され、かつそのようなものとして存在している。かつてこのような規模と組織にまで到達した社会は存在しなかった。ここでは個々の資本主義社会はそれぞれ独自の、独立した社会ではあるが、しかし同時に世界資本主義体制の各構成部分である。だからそれらは密接な相互依存の社会である。

ところが中世の封建社会は地球の各地域において相互に相離れて形成され、相互に別個の世界をなしている。すなわち日本の封建社会、中国の封建社会、ヨーロッパの封建社会等々として相離れて存在し、その間の相互依

存性はきわめて微弱であり、偶然的・副次的である。もちろんその内部に商品生産が発展するにつれて、相互の接触はしだいに増大した。しかしながら商品生産自体が封建社会にとっては副次的なものであり、ましてや世界市場の形成は、資本主義初期の形態たるマニユファクチュア——たとえ技術的にはまだ手工業的段階にあったにせよ——の形成と相関連してのみ必然となり、封建社会の崩壊をもたらすにいたったものだから、封建社会にとつてはそのような世界的結合が本質的な要求でなかったことは明かである。

封建社会にとつてはただ単に世界的結合が偶然であり、副次的であるばかりでなく、日本・中国・ヨーロッパというような地域的な結合といえども、資本主義社会の世界的結合が必然であるほどには、本質的な要求ではなかった。資本主義社会の単位が民族国家として形成された資本主義社会であるのにたいして、封建社会の基本的単位はおそらく一つの荘園、一つの部落であった。そして資本主義社会はたえずその単位構成たる民族国家としての枠をこえながら世界的な結びつきをもとめつつ、一つの世界体制をつくり出さざるをえなかったのにたいして、封建社会の単位社会たる荘園部落は、その荘園的、部落的自然経済の中に自己完結しているところの、それ故に結合力の弱い、孤立化的傾向の強い社会構造をなしていた。

このような相違は何に由来するもののだろうか？

だが、いったい、何故にわたしはここでこのような問題にかかわりはじめたのだろうか？ それは、この問題を明かにすることが、わたしのいう「下部構造としての国家」なるものの意味を明かにし、それによって国家独占資本主義についての基本的な理解を助けうると考えるからである。

では、右に提起した問題にもどうう。

一つの社会を一つの社会としての不可分な、完結した有機体たらしめているところのものは、その土台をなす生産関係が一つのプロダクションとしての不可分な統一体をなしているからである。社会の存続のために不可欠な生産、すなわち人間の自然への働きかけは、生産における人と人との一定の関係 \parallel 生産関係においてのみ実現されるわけであるが、生産関係はそのようなものとして必ず一個の統一体をなしている。そうでなければ社会的生産なるものはありえないし、社会的生産がなければ人間社会はありえない。生産とはそれ自体社会的なものである。封建社会においては、このような社会的生産の最小の単位が荘園であり、部落である。そして資本主義社会においては民族国家の枠における国民経済である。

古代社会 \parallel 奴隷制社会における社会的生産の単位は概念的には封建社会におけるそれよりもより包括的な、広範囲なものであり、原始社会 \parallel 氏族社会における単位は概念的にはさらにそれよりもより包括的、広範囲な氏族共同体である。

氏族共同体においては、生産は共同的・集団的に行われている。社会的生産はそのまま社会的なものとして、直接的に社会的・集団的形態において行われている。このような共同的な生産関係の一つ一つがそれぞれ氏族共同体の土台をなしており、そうした基礎構造をもって一つ一つの共同社会がそこにある。氏族共同体社会の土台たるこの生産関係の特質は、それ自体が同時に一つの血縁関係としてあらわれるということである。すなわち、同一の血縁関係が氏族共同体の生産関係の単位をなしているのである。もとより、人間はすでに道具をつかう動物として人間なのであるが、そのために人間はまず道具をつくらねばならぬ。人間が自然との物質代謝にあたって、まず自然に働きかけて自然に働きかけるための道具をつくりえたこと、そしてこの道具をもって自然に働

きかける道を発見せしめえたことこそが、人間を自然から分離し、これを自然に対立する第二の自然として、人間として創り出し、そのようなものとして人間を人間として形成せしめた所以ではある。人間の発達は、道具をつくり、道具をつかうものとしての人間の発達であり、そのかぎりにおいて道具の発達である。とはいえ、なおその初期においては、人間にとつての最大の生産力は、何よりもまず人間自身の労働力であつた。それゆえに、原始社会において族内近親婚から族外婚への家族形態の発展がより優秀な子孫を、すなわちより優秀な労働力を与えたことは、原始社会の生産力の発展における、したがつてその社会の発展における決定的に重要な役割を演じたものであつた。族内婚から族外婚への発展において、氏族共同体は母系制度として完成される。労働の生産性はこの血縁制度のもとにおいて、優秀な労働力を基礎として、さらにいっそう発達せしめられることができた。^(注)

(注) エンゲルスの指摘しているように、「歴史における究極の決定的契機は、直接的生命の生産および再生産である」(「家族、私有財産および国家の起源」序文、大月版選集一三巻下二五六ページ)。「一方では、生活手段の生産、すなわち衣食住の諸対象とそれに必要な道具の生産、他方では、人間そのものの生産、すなわち種の繁殖である。一定の歴史的時代および一定の国土の人間がそのもとで生活する社会的諸制度は、二とりの生産によつて制約される。すなわち、一方では労働の発展段階によつて、他方では家族の発展段階によつて」エンゲルスはこのように指摘し、さらにつづけて、「労働の発展がおくればいれはいるほど、またその生産物の量が、したがつて社会の富が制限されていれはいるほど、社会的秩序はそれだけよく血縁的結合によつて支配されるように見える」ことに注意をむけている。そして労働の生産性は、「血縁的結合にもとづく社会のこの編成のもとで」、しだいに発展することが指摘されているのである。

「直接的生命の生産および再生産」が「歴史における究極の決定的契機」であるということは、唯物史観の基本的な観点である。そしてそのうちの一方たる「生活手段の生産」は、人間が人間の環境たる自然との闘いにおいて、それへの働

きかけにおいて獲得するものであり、この際、この働きかけこそが「生産」とよばれ、「労働」とよばれるものに他ならない。そしてこの働きかけは生産における人と人との関係こそが生産関係とよばれるものに他ならない。他方、「人間そのものの生産」すなわち生殖における人間と人間との関係は「婚姻関係」であり、婚姻形態である。家族形態である。

ところで、生産力のきわめて低い原始社会の段階にあっては、この家族形態こそが「唯一の社会的関係」(「ドイツ・イデオロギー」大月版選集 一巻上二六ページ)である。それは「欲望の増大があらたな社会的諸関係をうみだし、人口の増加があらたな欲望をうみだすようになる」と、従属的な関係となる(同上)にしても、だから特この段階においては基礎的社會關係たる生産關係もまた家族形態においてしかあらわれないことができない。

かくて原始社会においては、生産力の徐々たる発展が人口の増加と氏族の分封、諸部族、諸氏族間の接触の増大となつてあらわれると同時に、血縁的結合關係がしだいに近親婚から族外婚にむかつて発展し、より優秀な子孫をより優秀な労働力として生み出すことによつて、生産力のいっせうの発展を生み出していった。すなわちこの段階においては「生活の生産、すなわち、労働においての自己の生活ならびに生殖においての他人の生活の生産は、それ自体ただちに一つの二重的關係としてあらわれる」(同上)という關係が、ここではその最も原初的な形態においてあらわれていたのである。しかしながらこのことは、人間の生活の生産における社會關係としての生産關係と、人間の生殖にあつたつての社會關係としての血縁關係は家族形態とが、同一の社會關係だということを意味するものではないことはもちろんである。だが、それらは人間相互の間における「欲望と生産の様式によつて制約され、そして人間そのものと起源をともしする唯物論的な關係」であることに注目されねばならない。

そのようなものとして、氏族共同体は同時に同一血縁体である。この血縁關係が一つの生産關係を構成している。そのかぎりでは両者は同じものである。原始社會が共同体的生産關係にある、というだけのことならば、それはまだその生産關係の最も抽象的な、一般的法則が規定されただけのことにとどまる。その生産關係が同時に一つの同一血縁關係としてのみあらわれるということは、後の共同社會は社會主義的・共產主義的社會との根本的な差違の一つが明かにされたことにもなる。原始共同社會と後の共同社會とは、後のが同じ共同体であつても、

はるかに高い水準に達した生産力を基礎としているものだというだけで異っているのではない。それだけのことなら、いわば量的な差にすぎない。しかし血縁的なものとそうでないものとのちがいたとすれば、そこに質的なちがいが見出されるのである。もちろんこの質的なちがいも、根本的には生産力の発展を基礎にして生じたものではある。だが、ただ単に生産力の水準の差にだけ帰してしまふことのできないもう一つの決定的な要素がある。社会主義の生産関係の一単位は、資本主義社会において基本的に完成された民族を基礎としているようにみえる。社会主義と資本主義においては、その生産関係の一単位が民族を基礎とする点では同じであるにしても、資本主義においてはそれら各単位の相互関係すなわち民族社会の相互関係が敵対的な、あるいはまた支配と従属との関係として形成されるのにたいして、社会主義においてはそれらの単位が、したがってそれぞれの民族社会が お互いに同位の兄弟関係として形成されることにおいて異っている。^(注)

(注) それぞれの社会は、ある限定をもった具体的な形態で実存する。すなわち、あるいは一つの血縁関係として、あるいは一つの民族関係として、奴隸社会は血縁関係としての原始民族共同体の最高の発展形態を継承しつつ、これを地縁関係に止揚したものであり、封建社会はこれを部落共同体にまで変容し、解体する。そしてそのような過程を通して同時に民族的諸関係が形成されてゆく。民族社会は資本主義的諸関係の発展を通じて原理的には最終的形成をみる。ちょうど血縁関係としての社会が氏族共同体的諸関係の最終的形成物であるように。それをこえるとき、原始共同体はしだいに崩壊してゆく。

近親婚から族外婚への発展を前提とするにしても、けっきょく氏族共同体の社会は一つの血縁関係の社会であり、それ以外でありえないことよって、この社会はきわめて狭隘な限界にとちこめられている。そのようなものとして一つの氏族共同体は一つの完結した世界をなし、一つ一つの氏族共同体は相互に無関係に、相互に外な

る他のものとして対立する。それはあたかも一蜂群の他蜂群におけるが如くである。しかしながら蜂群と異なるところは、原始社会の分封が基本的には生産力のなにかの発展と結びついていることである。だから分封は多かれ少かれ社会のより高次な形態への発展をもたらす前提となる。生産力の発展は他方ではまた他の諸氏族との接触を、すなわち戦争や交易の機会を増大させ、それを恒常的な生活形態たらしめる。族内婚から族外婚への発展はおそらくそのきわめて初期に生じたものである。そして氏族社会はしだいにより高次な組織形態たとえば部族に発展する。しかし基礎Ⅱ原型は、血縁関係の中に繫縛された共同体的生産関係である。

その後の社会は、この氏族共同体的生産関係の分解の上に生じたものである。分解は、生産力の低水準によって不可避であった集团的社会的労働の形態を、生産力のより発展した水準に適応するところの私的・個別的労働の形態に解体することを基礎にして、生じた。しかしながら、近代ブルジョア革命が農業革命を基礎にして私的小生産者の極限を生み出しうるにいたるまでは、私的個人的生産力は、ついにそれが出発した共同体的諸関係を終局的に解体するまでに到りつくことはできなかったのである。だから、たとえば封建的農民の私的労働は、入会地や共同の用排水路等の共同的所有と固く結びついており、植付や刈入れにおける共同的集团的労働から離れることはできなかったし、都市ギルドの親方の私的労働はギルド的共同体の諸関係から離れて存在することはできなかったのである。

ブルジョア的生産関係は、かかる小生産者を収奪しつつ、再び新たに社会的集团的労働の形態を回復した。それは長い人類の歴史における新たな転回点を準備したものであって、きわめて重大な意義をもつものであった。ブルジョア的生産関係の特質は、一方においてそれは社会的集团的生産を実現する形態でありながら、他方にお

いては依然として私的占有の形態として固持されている点にある。然るに、このようなブルジョア社会は、すでに一瞥したように、同時に民族社会として構成されているのである。原始社会が血縁関係において一単位をなしているように、資本主義社会は民族的関係において一単位をなしているのである。

二

以上の論述を通してわれわれが焦点をあわすべき問題の中心は、一つの社会が社会として存続するということが、それが一つの社会としての不可分の有機体をなしているということである。ということは、社会の土台をなす生産関係もまた独立した一社会を限界とする一単位として存在するということである。

生産力の発展によって人と人との生産における関係に利害の敵対的な対立が生じ、生産関係に敵対的な性格が生れ、社会が利害の相対立する階級関係に分裂した後においても、社会の社会としての統一性・不可分性は維持されること、生産関係はそうした利害の対立をふくみながら依然として一つの不可分の統一性をなし、不可分の独立的単位をなすことには変りはない。

いま、生産関係の、したがってまた社会の基礎的単位たる一つの氏族共同体と部落共同体とを比べるならば、いずれも一組の、一単位のプロダクトたる点ではまったく同じものであるが、前者が内部的に等質な一組であるのに対して、後者が敵対的階級的に分裂したところの一組である点では、まったく異った性質のものである。権力構造たる国家が生れるのは、生産関係がそのように内部的に分裂するにいたっている社会においてであるが、同時に、その生産関係が一組の不可分の生産関係としての統一性を保持していることが社会の成立の法的条件

であると同様に、国家の成立の法則的条件である。

中世封建社会における部落的共同社会の生産関係は、それだけで一つの有機体として、一つの統一性をもった生産の一単位として運動している。部落共同体はこのような土台の上に構築されているところの封建社会である。一つ一つの部落共同体が一つ一つの独立した一社会であり、封建世界の単位的構成である。そしてそれが同時に、封建国家が成立しうる最終的単位である。単位的封建国家はこの単位社会一つの全体として掌握している。国家権力はつねにこのような独立の一社会——しかし階級的に分裂した——を基礎として成立する。このような独立した一社会をその土台においてみるならば、一つのまとまった、独立した生産関係であり、生産関係の一単位である。生産関係の一単位としての、一組としてのこのようなまとまりを、わたしは、下部構造としての国家とよぶのである。

生産関係の一組としてのこのようなまとまりは、原始共同社会においても存在するし、また存在しなければならぬものである。しかしながらそこには国家権力は存在しないし、また存在すべき必然性もない。なぜなら、なるほどそれはまとまった、統一性のある一つの社会としての、また生産関係としての単位構成ではあるが、いまだ階級的分裂におちいついていないからして、国家を生み出すべき根拠をもたないからである。封建社会はすでに搾取関係に分裂している階級社会である。そこでは国家は必然である。だがそのばあい、国家権力がその社会を全体として統一的に把握しうる根拠は、その社会、その社会の土台をなす生産関係のまとまりにある。国家権力も単に直接的な生産者にたいする搾取の形態だけによって規定されるものではなく、具体的にはその生産関係の一単位、一組としてのまとまり方によって規定されるのである。このまとまり方はその社会の具体的な在り方

を規定する決定的要因でもある。封建的国家は、封建的生産関係のまとまり方、その単位構成の原理によって規定されている。国家を生み出す社会は階級社会であるが、またそれぞれのまとまり方をもつのである。部落共同体的なまとまり方もあれば国民経済的な、民族的なまとまり方もある。内部的には階級的に分裂している部落共同体は、それ自身、すでに封鎖的な封建的一国家である。そして、封鎖的・自己完結的な原始氏族社会が、そこでの生産力の発展とともに他の、並存する氏族社会と接触するうちに、より広汎な、より高次な社会組織体を構成していったように、部落共同体もしだいに結合し、より高次の、より広汎な、より複雑な封建社会Ⅱ封建国家にむかって形成されてゆく。そのばあい、封建社会における生産関係・所有関係が重層的であるように、そしてそれによって社会構造が身分階層的であるように、国家構造もまた重層的につきかさねられてゆく。しかしながらその最小の、最も基本的な単位は依然として部落・荘園であり、部落・荘園国家である。強大な封建国家もこの部落国家のつきかさねであるにすぎない。それ故何らかの衝撃が加えられるならば、その尨大な国家も一瞬にしてその最小の単位にまで瓦解することができるともいえる。また強大な封建権力は、相離れた各地に自己の封土をもつことができるともいえる。それらの領土は何れも単一の上級権力に従属し、一国家を構成することができる。封建末期、十六世紀のヨーロッパにおいては、特殊な国家連合が生れる。カルロス一世の国家はスペインからドイツにまたがり、フィリペ二世の王国はスペインのほか、イタリア、ネーデルランドにおよんだ。しかも新大陸、フィリピンに広大な植民地を支配した。しかしながらそれらの大王国はまた容易に崩壊しうべきものであったのである。それは古代のアレキサンダー大王の大帝国が一朝にして生み出され、一朝にして崩壊し去った如く。

封建国家がそのようなものであるのにたいして、資本主義国家はいわゆる民族国家である。民族はある意味に

おいて資本主義以前の産物である。資本主義は民族なるものをいわば所与のものとしてうけとる。しかしながら資本主義こそが民族の内部にあって民族を内部的に分裂せしめている国家的諸障壁——それを支えているものは原始的古代からもちこされていゝる生産力の不十分な発達水準であり、それを基礎にする従来の諸関係であるが——をうちくだき、眞の民族的統一をもちきたすことによつて、これ——民族——を最終的に完成したのである。原始共產體の生産關係が血縁的氏族の枠の單位として形成された如く、また、封建的生產關係が部落を最終的單位として形成された如く、資本主義的生產關係は、生産力の發展・生産の社会的形態の發展・社会的分業と集團的労働の發展によつて、一民族の範圍を單位とする生産關係として形成されたのである。

そのような單位は、それがそれとしてまとまつてゐること、そのまとまりにおいて一社會としての獨立的生活をなしうる單位であることを意味する。しかしながら個人が個人として獨立の人格であり、獨立の生活の保持者であるといふことは、同時に社会的集團的生活の中においてのみ個人でありうる如く、この社會單位は、他の同様な社會と共存し、相互にかかわりあひながら存続してゐたのである。どのような共存とかかわりあひの形態が必要であり、必然であつたのかは、生産力の發展水準とその生産關係の性格によつて異つたにせよ。

何れにせよ、生産關係の一單位が一社會を構成するといふことは、一つの社會とは、社會が社會として獨立して生活しうる一單位であることを意味する。内部的には階級對立に分裂してゐるようなばあひであつても、それが獨立の一社會であり、その根柢をなすものが生産關係の有機的一單位であることをすこしもまたげらるものではないばかりか、一定の生産關係にあつては、そのことは必然でさへある。

生産關係の一單位が一つの獨立の社會を構成する基本構造であるといふことは、この生産關係が一つのまとま

りをもった構成物であるということの意味する。そしてこのまとまりこそは、その生産関係における全成員を一つの生産関係につなぐ紐帯であり、社会の共同性の意識——これこそがその社会のイデオロギーに他ならないものであるが——の實在的基礎である。この共同性の意識が外化され、対象化されたものが、その社会の慣習的、制度的諸関係である。この対象化によって社会の共同意識としてのイデオロギーは客観的価値を附与され、社会の公的なものとなり、個々人の行動と判断の客観的公準となる。そして個々人のその社会全体にたいする紐帯は、こうした慣習や制度との関係を通してあらわれることになる。そしてそれによって共同性の意識は共同体の意志としてますます明確となつてゆく。階級社会においては、この公的イデオロギーが国家意志としてあらわれる。

階級社会の生産関係においては、人々は敵対的な利害関係におかれている。だがそれらの人々も、その生産関係における不可欠の構成員たることにおいては同一物であり、したがってその生産関係における共同の利害に結びつけられているのである。ここでの共同の利害とは、必ずしも同一の利害を意味しない。ただ何よりもまず、そこでの人々の相互の依存関係として存在するものである。^(注)そしてこのような依存関係をつくり出してゐるものが、その生産関係——社会関係——としてのまとまりである。その依存関係にもかかわらず、そのまとまりにもかかわらず、そこにはむしろ相いれることのできない利害の対立がきびしく存在するのである。

(注) 「……この共同利害は『一般なもの』としてたんに概念のうちに存在するようなものではなく、分業をおこなう個々人の相互依存関係として、何よりもまず現実の中に存在するのである」(「ドイッ・イデオロギー」前掲大月版 三二ページ) そのうえ、この依存関係は、地縁とか民衆とかの具体的有限定の中にあるのであつて、封建的生産関係とか、資本主義関係とかいうだけの抽象的、一般的なものではない。

この利害の対立はそれ故に、必然に、その社会的共同意識における分裂を生ぜしめざるをえない。すなわち社

会的イデオロギーの分裂を生ぜしめざるをえない。しかしながら、そのように分裂したイデオロギーはそれぞれの階級の立場におけるその社会についての共同意識に社会的意識形態であり、いわばその社会における自己——自己の階級——の地位についての「自己認識」に他ならない。だがそのかぎりでの対立であり、分裂であるにすぎず、あくまでも同一の社会が共同のものとして前提されている。そこで被支配階級がどこまでも単なる被支配階級にとどまるものであるかぎり、たとえそこにきびしい階級利害の対立があり、そのイデオロギー的表現が見出されるにしても——そのようなイデオロギー的対立は、その社会における階級的利害の対立が必然であるように必然である——、終局的には自分を支配階級の利益に随順するものとしてしか表現することはできない。なぜならば、それは同一の社会における共同意識の二つの形態たるにすぎないからである。当然、支配階級のイデオロギーにおいても、その社会における階級利害の対立はその表現を見出している。そしていずれの階級の立場からも、終局的には支配階級の特殊利害がその社会の公的利害を代表するものとして第一義的に承認せられ、被支配階級の特殊利害は社会における第二義的第三義的な、従属的な利害としてしかとりあげられない。その社会が前提とされるかぎり、被支配階級といえども、現存する生産関係とそれを基礎とする社会の共同意識とは異った共同意識をもつことはできないのは当然であり、従ってまた彼らの特殊利害が支配階級の特殊利害にたいして従属的なものとしてしかあらわれないのも当然である。ただ、旧来の生産関係に代って、新たに、新たな生産関係に基いて形成される新たな社会のイデオロギー、特にその社会を代表する新たな支配階級、すなわち新たな社会の新たな主人公だが、新たなイデオロギーをもって旧来のイデオロギーに対して決定的に対立し、これと決定的に闘い、終局的にこれを克服することができるだけである。

このようにして、所与の生産関係のもとにおいて、対立する社会集団の間に、その社会の共同の利害と、それは区別される特殊な利害との分裂が生ずる。両者は共同の利害によって結びつけられながら、しかも同時に、相いれがたくきびしく対立した利害の上に立たされているのである。それは共同利害と特殊利害の分裂にほかならない。「ほかならぬ特殊利害と共同利害とのこの矛盾にもとづいて、共同利害は、個別および全体の利害からきりはなされて、国家として一個独立の姿をとる。と同時に、それは幻想的な共同社会性として出現するのである」（前掲三三ページ）とはいえ、それは何らの根柢もない、単なる幻想ではけつてなかつた。そこには明かな実在的な基礎がある。「血肉、言語、比較的大規模な分業、その他の利害というような、各家族集団や種族集団のうちに存在する緒紐帯」（同上）がそれであり、とくに、階級支配として存在する紐帯、一階級が他の諸階級を支配するという関係であらわれる階級支配の紐帯、がそれである。それらの紐帯こそが国家としてあらわれる。「幻想的な共同性」の実在的基礎なのである。

国家はそのようなものとしてイデオロギーにもとづく構築物であり、そしてそのようなものとして社会の上部構造である。ただここでわれわれがみたことは、その実在的基礎が「各家族集団や種族集団のうちに存在する諸紐帯」、とくに「分業を行う個々人の相互の依存関係」すなわち生産関係のうちに見出される紐帯だということである。ここでの紐帯とは、その個々の構成員の依存関係である。だがこの紐帯、この依存関係はノッペラボーな、単なる無限の連鎖ではない。ある一つの全体にまとめあげるところの関係であり、一つのまとまりそれ自体である。そのまとまりが、たとえば資本主義においてならば、日本の資本主義、アメリカの資本主義、イギリスの資本主義というように、それぞれが一個独立の資本主義社会としてあらわれるのである。まさにこのまとまり

こそが、国家なる公的イデオロギーの幻想的共同性の實在的基礎なのであり、これをわたしは「下部構造としての国家」とよぶのである。この紐帯は、一つの生産関係が一つのまとまった生産関係として一社会の土台をなしているということ自体に示されているのであり、各個人の相互依存関係のなかにその実体が示されているのであるが、国家的な治水工事や灌漑工事はこのようなまとまりがあつてできることであり、貨幣の国家的鑄造や、全国的な交通や運輸の手段がしばしば国家的運営に委ねられる如きも、このまとまりなしには考えられないことである。このようにしてつくりあげられた国家的機構を、わたしは、国家における下部構造の機構とよぶのである。

国家としての国家、本来の国家たるものは、この實在的基礎の上に築きあげられた一つの幻想的共同性としてのイデオロギーにもとづく構築物なのであり、いかなる意味においても下部構造ではありえない。一方、かの實在的基礎なるものも、いかなる意味においても上部構造ではありえないのである。と同時に、いかなる国家も、つねに、公的イデオロギーのこの實在的基礎なしには存在しえないし、また、この實在的基礎とのかかわりあいなしには存在しえないのである。そしてまた、国家がその経済的機能や職責を要求されるのは、つねに、生産関係におけるこの紐帯的統一の機能を操作する任務に關してである。そしていかなる国家も、生産関係における總括的紐帯的機能が要求されるときには、つねにこれに應じていたし、また応ずべきものであつたのである。そしてそのことがさきにも指摘したような治水灌漑の工事となり、貨幣鑄造の業務となつたのである。なぜならば、生産関係のこのまとまりに依拠してのみ行われような下部構造の活動は、そのまとまりが社会の公的イデオロギーによって制度化された諸関係——階級社会においてはそれは国家である——を通じてしか実現されえないからである。そしてそれによって実現された下部構造の具体的な機能や形態は、必ず国家的形

態においてあらわれるのである。たとえば貨幣の鑄造は、商品経済が一定の発展段階に達した社会においては、商品流通のまとまりを実現しうるために不可欠の業務であるが、それは必ず国家的形態で行われる。なぜならばそれ以下に社会のまとまりを実現する形態がないからである。そこに実現されたものは、国家形態における生産関係である。

三

国家独占資本主義なるものは、いかなる歴史の段階においてであれ、国家たるものが存在する社会において生じうる生産関係の国家的形態が、独占資本主義の段階においてとった形態である。

最近、佐藤（昇）は、国家独占資本主義についての今井の「経済国家」の理論を批判した（佐藤「国家独占資本主義と『経済国家』——『日本経済分析』第十三集）。これにたいしては今井自身が答えるであろうが、しかし佐藤の今井にたいする批判は、わたしにたいする批判をふくむものである。そのかぎりにおいて、わたしも佐藤の批判にたいして答えたい。それによってまた、ちょうどわたしがいま問題としている点をいっそう明瞭にする手がかりともなるとおもわれる点があるので、特にその点にしほって問題をとりあげたい。だがそのためにはやはり今井とわたしとの相違をも一応明かにしておかねばならないようにおもわれる。

たしかに今井の説については検討すべき点があるようにおもわれる。それについてはわたしは以前にもすこしふれたが、今井はこれを反論している。しかし依然として問題はのこされているようにおもわれる。

問題は依然として、今井が「本来の意味の国家」と「非政治的国家」とを区別し、後者を「経済的

国家」とよんでいる点にあるようである。「本来の意味の国家でない国家」(A)とは、今井の主張するように、たしかに、「抑圧のための特殊な機関」(B)であり、またたしかに「特殊な『政治的国家』」(C)であり、さらに「多数者である被搾取者が少数者である搾取者を抑圧する」ための「過渡的な国家」(D)である。そこまではわたしも同じく考える。ところが今井によれば、この「過渡的国家」(D)は「死滅しつつある国家」(E)ではないのである。「死滅しつつある国家」(E)は「非政治的国家」(F)なのであって、この「非政治的国家」なるものは「本来の意味の国家でない国家」(A)と「けっして同じでない」(今井「国家独占資本主義の諸問題」——「日本の国家独占資本主義」三三二ページ。なおここでの今井の説はこの三〇〜三二ページの間の説明によったものである)。もっとも、正確にはかんたんにE∥Fではなく、「死滅の一定の段階では、これを非政治的国家とよぶことができる」というものなのである。だがそうだとするならば、Eは全体としては何なのだろうか？ 死滅の一定の段階の前および後では、Eは何なのだろうか？ わたしは、「死滅しつつある国家」(E)はまた「過渡的な国家」(D)なのであり、また(A)であり、(B)であり、(C)である、と考える。わたしによれば、A∥B∥C∥Dである——ここまでは今井とわたしは一致する——ばかりでなく、DはまたEであり、Eはその死滅の一定の段階においてもはやFとよぶことができるにいたるのである。だがそれ(F)は今井の考えるような「経済的国家」(G)ではない。しかし今井によれば、Eはその一定段階においてFであり、このFなるものは、「資本主義の内部においても存在するところの国家」であり、「経済的土台そのもの」ともよばるべきものと考えられている「経済的国家」なのである。

だがここで、今井が説明しなければならない問題は、「死滅しつつある国家」(E)は何処から出てきたのか、

という問題である。もはや「本来の意味の国家でない国家」（A）となり、「過渡的な国家」（D）となった国家こそが「死滅しつつある国家」（E）なのではないか？　そしてそのEの一定の段階こそが（F）なのである。今井のように、AはけっしてFでなく、FとDとは別なものだとしたならば、Eはいったい何処から説明されるのだろうか？　そしてこのような「死滅しつつある国家」の一定段階が資本主義の内部にも存在するとはいったいどのようなことなのだろうか？

以上のような今井の論理にたいする疑問・批判は、佐藤の今井にたいする批判と共通している点である。それにもかかわらず、佐藤の批判はわたしにたいしてもまた妥当するものである。

佐藤の批判の中心は、わたしも今井と同じように、生産関係の担い手と生産関係そのものとを混同しているという点にある。その際佐藤はわたしの説を要約して次のようにいっている。——「井汲説によれば、国家が生産力を自己の所有にうつすことは国家が下部構造になることではなく、国家における下部構造の機構が増大することとすぎないが、同時にこの国家はそれ自身としては下部構造の一部だというのである」（前掲一七九ページ）——。以上のような要約の後、佐藤はつづけて、「これではまったくなんのこともやらからないが」といっているが、いかにも、「これではなんのこともやらからない」。しかしわたしは実はそのようにはいっていないのである。どのようなにいつているのかということについては、この論文がすでに一応説明を加えてきたところである。それはそれとして、生産関係と生産関係の担い手とを区別することによって国家独占資本主義論についての混乱を救いえたとする佐藤の論理にはたして問題がないだろうか？　わたしの見るところでは、今井におけるとは異ったところの別な混乱がそこにはある。その混乱の原因は、一つには、彼がエンゲルスの命題——「近代国家がますます

す多くの生産力を自分の所有にうつせばうつすほど、それは（理念上の総資本家としての國家……井波）ますます現実の総資本家となり、ますます多くの国民を搾取するようになる」という命題から、事実をただ演繹的に説明しようとした点にあるようにおもわれる。エンゲルスのこの命題にはたしかに事態の本質にたいするある滲透力を感じしめるものがある。だがそれを正しく発展させるためには、われわれ自身がもう一度根柢から事実の論理を追及し、組み立て上げてゆかなければならないだろう。

生産関係とその担い手とを混同してはならないという佐藤の論理において、國家は生産関係の担い手たることのできるようになっていくが、そもそも國家とはいかなるものなのだろうか？

國家は社會の上部構造の一つである。この点については、佐藤もおそらく異議のないところであろう。ところで、いまもし下部構造Ⅱ生産関係の担い手が問題とならしたら、上部構造の担い手も問題になりうるだろう。上部構造の担い手は誰れでありうるだろうか？ 國家は下部構造の担い手たることのできたとするならば、また、上部構造の担い手であることもできそうなるものである。しかしながら上部構造たる國家が上部構造たる國家の担い手だということは、なんのことやらわからないことになるだろう。とすると、國家は下部構造の担い手たることのできるが、上部構造の担い手たることのできないというわけであろうか？

ここで佐藤の「生産関係の担い手」という考え方を検討してみる必要がある。

いったい生産関係とは何であるか？ それは生産における人と人との関係である。それはまた、一定の段階における生産力の社会的組織形態——自然に働きかけて人間の生活資料を獲得する力を人間の社会的組織において実現する形態——である、ともいうことができるだろう。なぜならば、生産とは人間が自然に働きかけて生活資

料を獲得することであるが、その獲得能力の大小や発展は生産力としてあらわされるものであり、生産力の発展につれて、生産における人と人との関係も変化するものだからである。株式会社とは、人と人との関係の一定の組織化だという点からいっても、生産力の組織形態だという点からいっても、生産関係の一形態である。株式会社において、資本家は株主として組織され、株主總會、取締役会、専務、社長等の形態において支配しており、他方労働者もまたその企業設備の技術的要求（生産力的要求）によって集団的に組織されている。人々はここで——株式会社において——一定の生産における関係を結んでいる。生産関係とは人間と人間とのある関係であって、人間の外にあるものではない。佐藤は資本主義的生産関係の担い手を資力家だけのようにいつているが、もちろん労働者もその一方の担い手であるだろう。その点についてはおそらく佐藤も異議はないであろう。もしもその生産関係を代表するもの、という意味でなら資本家といつてよいであろうが、そうでないならば、両者は共に担い手である。

国有企業も生産関係の一形態である。ということとは、これも人と人との生産における関係だということであり、また生産力の最も社会的な形態での組織だということである。現代の生産力の社会的な性格は、資本主義的生産関係のもとにおいても、できるだけ社会的な形態が与えられることをのぞんでいる。そうした社会的な形態として、資本主義においては、株式会社の形態が最も広くゆきわたっている。しかも生産力の発展とともに会社の規模はますます大きく、従つて株主はますます多く、株式会社はますます社会的な形態をとりつつある。国有企業はそのいつそう発展した形態であるが、たんにそれだけではなく、生産関係の全体にかかわる性格をもつこと、すなわち社会的性格をもつことで、資本主義における社会化の最高の形態だといふべきなのである。もちろん

そうした社会化の最高形態にも、いろいろな段階や色合いがありうるので、単純化してしまつてはならない。さらに国有化の形態ばかりでなく、管理や統制の形態での社会化の形態もありうるのであり、さしあたりはむしろこうした形態の方がより注目されるべきなのである。

だが、すべてそれらのものは国家的形態をもつ。問題は、国家的形態をもつ、という、このことである。なぜ国家的形態をもつのか？ また国家的形態というのはどういうことなのか？それは、生産の最高の社会的形態が国家権力によつて組織・形成され、操作されるということである。そのことが社会化の形態が国家的形態であられるということなのである。

では何故に社会化の最高の形態は国家権力によつてのみ組織され、操作されるのか？

さきにわれわれは、生産関係が一つの生産関係としてのまとまりにおいて存在するということ、生産関係の統一物としての組織性こそが人々を結びつける紐帯にはかならないことを指摘した（一、二参照）。われわれはそこで、その統一性なるものは一般的には生産における人人の依存関係として実在していることを主張した。統一性はこの依存関係が成立しうる基礎である。統一性なくしておよそ依存関係なるものは成り立ちえない。この統一性は生産関係がいくらかでも発達した段階に達するならば、必ずその機構的表現を見出すものであつて、すでに原始共同体の社会においても、生産関係のこの統一性に依拠して、これを全体的に掌握する一定の管理・統制の機構を生み出していた。それは社会の他の統一的所為や運営（軍営、祭事等の）の機構といわば合体していた。社会の階級的分裂とともに発生した国家は、直接にはこの機構的基礎の上に、そのイデオロギー的構築を加えていたのである。この国家的イデオロギーなるものは、生産関係の統一性を根柢にもつところの社会の統一性もそ

の實在的基礎として發生したものであるが、共同体社会におけるかの機構は、このようなイデオロギーを生み出す直接的な媒介項であつた。そして、いまやそのよにうして發生したイデオロギーが、その機構をイデオロギー的國家的支配の構築物として変容してゆき、かつ全機構をそのようなものとして強化していったのである。このようにして生産關係の全体を把握する機構および能力もまたイデオロギー的國家的支配の機構に包摂されていった。したがつていまや、たとえば貨幣の鑄造の業務の如きも國家的支配の物的手段たるにいたつてゐるのであるが、鑄造業務自体はあくまでも生産關係に属する業務なのであり、商品生産の諸關係の全体としての運営において不可欠の業務なのである。このような下部構造全体としての不可欠の業務は、従来の共同社会においては、社会の共同業務として共同業務機構においてとり行われたであろうが、それは社会的である以外に何らの「國家的」形態を必要とするものではなかつた。すなわち國家權力を通じて形成され、操作される必要はなかつた。何故なら國家たるものは当時においては存在せず、ただ社会的共同的業務の機構だけがあつたからである。社会の共同意志が直接にこの機構をつくりあげていたからである。いまや社会の共同意志は一つの「幻想的」な共同意志たる國家意志に転化した。社会の共同的全体的業務もまたこの國家意志に薰染されざるをえないのである。それはその生産關係自体が階級的性格をもち、従つてまた共同業務自体が階級的性格をもたざるをえなくなつたからである（この点についても一、二参照）。

以上から結論しうることは、國家が生産關係の担い手であるという佐藤の命題を承認することはできないといふことである。彼は、理念上の總資本家たる國家が現實の總資本家になるというエンゲルスの言葉から思いついて、國家を直ちに擬人化して、国有企業における所有者としての國家の地位は私的企業の所有者としての資本家

と同じものであるとし、企業を生産関係すなわち土台 \parallel 下部構造の一要素とすることはできても、資本家を下部構造だと考えることはまったくおかしいのと同じように、国有企業を下部構造と考えることはできても、その所有者、担い手たる国家を「下部構造としての国家」というような範疇において考えることはまったく不合理であると主張しているのである。しかしながら、資本家は上部構造でない如く下部構造でもないが、国家は上部構造である。国家は上部構造でもなく、下部構造でもなく、それらの担い手である、といったらどんなものであるか？

他方、担い手としての資本家、という考え方も、実はそれほど合理的なものではない。資本家は生産における人の関係では下部構造の要素であり、国家やイデオロギーの活動やそれに基づく機構においても、その構成要素である。労働者についても同じである。殊に労働者は労働力としては、彼自身、生産力の要素でさえある。およそ社会、その全関係は人間によって構成されているものである。人間を離れて社会はなく、社会の機構はない。人間をはなれて国家もなく、上部構造もなく、下部構造も生産関係もない。その意味において人間だけが社会の担い手であり、そのすべての構造の担い手であるとともに、その構成要素それ自体、構成関係それ自体である。担い手という考え方は、むしろ、生産関係の外に人間をおいて考える危険性をもっている。人間は人間であるが故に、また必然に一定の人間との生産における関係において、生産関係において、在るのである。それは人間の在り方であり、人間の在り方の外に人間があるのではない。

国家独占資本主義とは、生産関係としての独占体と、以上にのべたような生産における国家的機構との癒合した形態における、資本主義的生産関係の下における生産力——高度な社会的性格にまで発展した——の組織化の

一形態であり、そのようなものとしての生産関係である。しかもそれは私的独占によって支配されている生産関係である。

そのような生産関係を形成し、操作するには、国家が必要である。独占がこのような生産関係の支配者であるのは、独占ブルジョアジーが国家権力を支配しているからである。だが政治的力関係の変化は、このような生産組織を形成し、運営するにあたって、国家権力とその機構に一定の影響を及ぼし、ある変化を生ぜしめ、それによってそのような生産の組織化に一定の変化を与え、さらに進んで独占との結合をきりはなし、組織化の方向を国民的な利益に合致せしめるように導くことも可能である。（一九六二・七・四）